

# 津波と空襲（三月十一、十日）

市川 浩

巡り來たる三月十一日、思ひ起こす平成二十三年、神奈川縣川崎市にて地震による停電を感知、その後、都内交通機關殆ど運轉中止の報あり、後に東日本大震災の名にて知られり。不幸にも震源域内の福島第一原発にて爐心冷却機能喪失ありて同地方は二重の災禍を被り、八年後の今日なほ避難所生活強ひらるゝ地域残存す。

抑も大地震は我が日本列島の宿痾にて、有史以來數々の大地震を経験す。我小學生時、國語教材「稻叢の火」を學び、中學にて津波は英語にても「tsunami」と知る。然れども實際に狀況を垣間見たるは平成十六年スマトラ島沖地震の電視映像が初めなりき。又「津波てんでんこ」は定年退職後、三陸地方を旅行中に聞く。文語の苑風に解説せば、「てんでん」は「勝手に」の末尾が撥音化せるものにて、「めいめいに」の意、「こ」は力變動詞「來」の命令形「來」にして「津波の時は銘々の判断で安全な場所まで来て御出で」の意味なり。これを力説せられし中年の女性、東日本大震災直後の電視畫面に無事避難の御姿拜見、改めて標語の御利益に共感す。

一方に於て、災害に對する處置の失敗は散發的に報道あるも、それに對する改善策は報道尠し。一つには、對策の不備を指摘せば、それに依る莫大の補償訴追豫想せらるゝが故に、餘程の確證を用意する必要あるなど、率直なる反省と對策を話合ふ能はざるを憂ふ。しかも裁判に於ける争點が災害の豫見の有無といひて、豫見不能が無罪、豫見するも失敗が有罪となるは、不勉強こそ保身の要とするに等しけれ。長年工場の操業に携はれる經驗に照しても違和感なしとせず。

關係者間にては十分に話合ふと雖も、失敗の中には、世間一般にても應用可能の例多かるべく、又極度の専門的分野にては、免角一般常識の通ぜざる故の事故例多かるに非ずや。「失敗の共有」こそは事故防止の基本なれ。

最近圍碁・將棋の世界に人工知能の導入進みて、今までの「定跡」の類大幅に見直されつゝありと云々。これ極めて重要な所以は、從來の定跡は、少くとも江戸時代より今日までの數百年間、才能に恵まれたる名人上手積年の研究に基く。然るに人工知能は單純に可能なる手順を極めて精緻に検討して最善を求む。その結果定跡の見直し大幅に行はれ、「何故にぞ今まで氣附かざる」との歎き斯界に滿つ。以て工業技術の安全に他山の石とすべし。

東日本大震災の日に就きては本年も様々の現状報道ある中、その前日に當る三月十日の夜、前の大戦末期の昭和二十年、初めて米軍機による東京大空襲を受けたるも、今や關聯する報道殆どなし。然れども豫想せらるゝ日本近海の太平洋海臺の振動による巨大地震の發生接近の可能性警戒強まる中、同時發生の懼れある大火災への對應に、東京を焼野原と化せりし爆撃火災は貴重なる防衛指針を與ふべし。

中學一年より二年に掛けての記憶を辿るに、當時先行せる小規模焼夷彈爆撃には、住民の消火活動目ざましかれば、被害も少く、空襲警報發令のラヂオ放送にては、「敢闘を望む」のメッセージ聴くこと多かれど、大空襲下の消火活動は人的被害大にして、早めの避難ぞ推奨せらるゝに至る。二ヶ月餘り後の五月二十三日夜避難先より、翌朝我が家へ歸りてすべて灰塵に歸しつるを見たり。後に同じ日、自宅にて放水、類焼を免れぬる級友の話聞く。大地震の後の火災は何としても避くべく、道路の各所に放水、消火の器材配置を考ふべき時なり。

（平成三十一年三月二十五日受附）